早朝の 6 時。吾妻連峰の上に月がかかっていました。3 月下旬。。朝の空気は少しひんやりしていますが、茫洋とした景色の中に春の気配が感じられます。農家のみなさんは桃の選定や、消毒作業がはじまっています。よやく待ちに待った春がやってきます。

そらいろだより　令和４年　春号

追悼

後藤　金市さん

身をもって教えてくれた「主体」の大切さ

生き切った九十六年の人生。お疲れ様。合掌。

昨年の 6 月。96 歳の誕生日のお祝い。手づくりケーキに満面の笑みを見せてくれた金市さん。

「夢のようだ。これは現実か？」。長年、自立式浴槽での介助をしてきましたが、「夢」という言葉で表現した方は、後にも先にも金市さんだけです。

何が夢のようだったのか、ご本人からもう聞くことはできませんが、おそらくお風呂のお声かけ、脱衣室から浴室まで車いすでの移動、そして洗台に座ったまま、足から湯船に入って、肩までとっぷりと浸かるという一連の介助に思わず感動して出てきた言葉が「夢のようだ」だったのではないかと勝手に解釈しています。

昨年 6 月の誕生会でみせてくれた満面の笑顔。パタパタゲームやボーリングゲームなどの運動ゲームで見せてくれた真剣な表情。トイレの定期誘導やお声掛けなど意味がなく、「行くときは行く」「行かないときは行かない」。スタッフを頼ることなどなく、言葉よりも先に身体が動いてしまう、ゆるぎない「主体」のかたまりだった金市さんでした。

農家の 10 人兄弟の長男として生まれ、農業一筋に家族を養ってきた金市さん。最期まで自分の思うままに 96 年を生き切った人生だったのだと思います。本当お疲れ様でした。スタッフ一同、心からご冥福をお祈りいたします。

そらいろデイがオープンして半年ほど経過した昨年 4 月、4 番目のご利用者としてそらいろデイにやってきたのが後藤金一さんでした。当時 95 歳。息子さんと一緒に見学にやってきた金一さんは、挨拶もそこそこにフロアの壁にしつらえた本棚に直行。池上彰一郎の時代小説「本能寺」を手にとり、「これを借りる」。これが金市さんの第一声でした。

いきなり本を手にするとは「すごいおじいさんがやってきた」。これが正直な感想でした。難聴のためスムーズなコミュニケーションが難しく、足腰が弱り、ご自宅で転倒されるなどしていたおしいさんでした。そんな金市さんが、はじめてそらいろデイのヒノキ風呂に入った時の一言は、忘れることができません。

そらいろ農園始動

キタアカリ３キロ植え付け完了

そらいろ農園始動！。キタアカリ 3 キロの種芋を植えつけました。畝山 2 列分。夏には豊作間違いなし。この日はスタッフをはじめその旦那さんや親戚の方々もお手伝いにきてくれた大助かりでした。このあと、今年はキュウリ、ナス、豆、カボチャを植える予定です。昨年秋に植えつけた玉ねぎは順調に育っています。今から収穫が楽しみです。